

FUKUUZU タイムス VOL.6

2022 年度 1 次隊

派遣国:ウズベキスタン

職種:ラグビー

氏名:森谷理央



●近況報告

前回はフハラ州立大学の男子ラグビー部についてお伝えしましたが、今回は同大学の女子ラグビー部でのスポットコーチングに関してお話しさせていただきます。まず第一にですが、今回の出張には女子ラグビー部の指導は含まれていませんでした。そもそも、ラグビー連盟からも女子ラグビー部の存在さえ聞かされていなかったという始末です。日本ですと、少しの準備不足や情報共有ミスがあれば大問題になりますが、ウズベキスタンでは、官公庁レベルでさえ、こういった伝達ミスは日常茶飯事です。

実はありがたいことに前回お伝えした男子ラグビー部へのスポットコーチングが思いの外、高評価を頂いたらしく、その話が女子ラグビー部にも伝わり、急遽オファーを頂いたのです。



フハラ州立大学女子ラグビー部と。この日はサッカー部とのミスコミュニケーションがあり、グラウンドが使えず、急遽、ハンドボール上での練習となった。

しかし、私には一つの懸念がありました。それは、私自身、女子ラグビーにはこれまで関わったことがないということでしたが、更に大きな懸念としてはこの国の異性間の状況です。そもそもこの国はムスリムの国なので、男女間、異性の関係性については、日本とは大きく異なっています。そのうえ、ジェンダー間のギャップもかなり大きい国ですので、ラグビーという身体的接触が伴う競技を、異性に対してどのように指導すればよいのだろうかという不安がありました。

兎も角、引き受けたからには引き下がれないのでグラウンドへ赴いてから判断するしかないと思い、不安を抱えながら大学へ向かいました。グラウンドでは選手6名、コーチ2名が迎えてくれました。お互いに緊張した雰囲気だったので、まずは、ボールを使った簡単なシクでアクティベーションを行い、アイスブレーキングを図りました。その後、個々のスキルとラグビー理解度を見たいので、タッチフットに切り替え、スキル指導に入りました。

総じて言うと、男子ラグビー部よりもアジリティ、クイックネス等の潜在的な身体能力は高く、ラグビー理解度も高いなと感じました。ただウズベキスタン人特有の自尊心の強さが出てしまっているなということも感じました。具体的に申し上げますと、スクルーパスの指導を行った際、右スクルーを既に投げられる選手に対し、左スクルーを見せてほしいと言うと、頑なに右スクルーのみを投げ続けます。理由が分からず困惑しましたが暫くしてから理由が分かりました。つまり「左スクルーがそもそも投げられないが、そのことに対し劣等感を感じていて、できないということを知られたくないし自分でも認めたくない」という理由でした。



この点に関しては、これまで1年以上この国で活動してきて頻繁に見受けられることでしたし、特に代表の2軍、3軍でも散見されることなので狼狽するということは特になく、伝え方を工夫することにしました。具体的には、「右スクルーパスが本当に上手だし、それだけでも試合はできるけど、左スクルーも投げられるようになれば、もっとプレーの幅が広がるし、楽しくなるよ」と伝えました。すると、積極的に左スクルーパスにも取り組むようになりました。

個人的な感覚としては 個々人の既有的ラグビー理解度が高いので、男子ラグビー部よりも、短時間で大きな改善が見受けられました。今回は、ハンドリングの基礎的なコーチングのみになってしまいましたが、今後、DF も含めて継続的なコーチングを行えば、伸び代はかないあるだろうなと感じました。この国ではラグビーは盛んではない上、ムスリムの国なので、女子ラグビーともなれば、奇異な眼で見られることもあります。しかし、それにも関わらず、ラグビーを続けているということは、ラグビーが好きなんだろうなと思いましたし、そこに感銘を受けました。

ウズベキスタンでは、ラグビー経験のあるコーチが少なく、その傾向は地方に行くほど顕著なので、やはり、首都のチームと地方のチームとでは環境、情報格差があるように思います。しかし、それぞれのプレーヤーがラグビーが好きで、技術の向上を望んでいるのであれば、最大限尽力させてもらいたいですし、それぞれラグビー隊員として派遣された己の使命であると思っています。



今回は、7/14の小学校でのラグビーの普及活動についてお伝えします。